

母子の関係性の改善

—親子教室での行動観察を通して

An improvement in the relationship between mother and child Through the observation upon their behavior in the room for the education of children joining with their mothers

文学研究科教育学専攻臨床心理学専修博士前期課程修了

高 木 麻 美 子

TAKAGI, Mamiko

I 現代の母親と子育ての概観

現状の問題点を示すために、現代の母親と子育てに関する先行研究について概観する。

1 現代の母親と子育ての状況

馬居⁵⁶⁾によると、現代の母親が生まれ育った時代も現代と同様、核家族の少子世代であり、母親たちは学業成績のように、自分の努力が直接的に成果へと結びつくといった形での自己実現を目指してきた。鯨岡³⁴⁾は現代の母親の子育てに対して、次のように述べている。「自ら自立した一つの主体として「思い通り」の自己実現を目指してきた<育てる者>たちは、子どもを育てるという営みをも自らの計画や都合などに沿って展開しようとしがちである」。また柏木¹⁹⁾は「自分が「つくる」と決めて産んだ子ども。それはほかでもない自分の意志で決断して産んだもの、それはとにかく自分のもちもののように思いがちにさせます。(中略) あたかも自分の所有物(である子ども)を自分の力でよりいいものにする、上等なもちものにするような形になりやすいことも否めません」と述べている。さらにElkind, D.⁵⁾は親自身が子どもの人生を良くも悪くもできると考えがちなことを述べ、子どもを親の所有物とし、常に自分の意のままになる存在として現代の母親は認識する傾向が強いことが示唆している。また土岐⁵³⁾は、核家族の少子世代について「1家庭の人数が少ないということは、家庭の中の人間の種類が少ないことだ。このことは、人間理解、人間関係の複雑さを学ぶ場としての家庭が貧弱であるといえる」と論じ、親自身の人間関係を培う力の弱さを指摘している。

これらのような現代の母親にとって、子育てとはどのようなものなのか。亀口¹⁴⁾、村瀬³⁷⁾は、現代の若い母親は育児関連の体験の機会が極端に少ないため、子育てに戸惑うのは当然であると述べている。また山崎⁵⁸⁾は、氾濫している情報から何を取捨選択すべきか判断がつかず、振り回されている母

親たちについて論じている。その上現代でもわが国に根強く残っている「母性神話」が、若い母親たちに与えている影響について、大日向⁴³⁾は「子どもの成長発達の過程で何か問題が生じれば、それは子育てを任せていた母親の責任だ、という批判の声となって、母親を追いつめるもの」と論じている。村井³⁶⁾も母親は子どもの能力・性格を決めてしまうことなどできないのに、あたかもそんな力があるかのように責任を持たされ非難されるという状況は、母親たちの精神状態を悪くしていることについて述べている。

上述のような現代の母親の傾向と、彼女らを取り巻く社会環境は、母親たちの子育てに対して一層の不安や焦り、すなわち子育て不安を及ぼしているものと筆者は考える。

2 子育て不安

奥石²⁸⁾は子育て不安の定義として、子どもとの関わりの中で生じた、身体的・精神的に非常に不安定な状態全般を捉え、「乳幼児を抱える養育者に育児に関連して感じる日常のささいな混乱が蓄積された結果生じた、否定的な情動、育児への制御不能感」と述べている。特徴として次の3点があげられよう。まず、子どもに対する特別の思い入れから、母親が自分の思う通りに子どもを引き込もうとする統制的行動を取りやすい点である。次に、指摘を受けることに非常に敏感であり、自分自身を否定されたような感覚に陥ってしまうといった母親のネガティブな情報処理の方法である。3点目は、自分の子どもに対して、上手く育つかはすべて母親である自分次第という重責感を抱いており、子どもとの葛藤的場面では自分の内面に注目したり、状況を自分に関連付けて認知しやすいという母親の自己注目の傾向である。

3 母親自身の成長

上述のように子育てに対し、現代の母親は多くの不安を抱いていると思われるが、一方で自分自身の成長発達の機会としてもとらえている。藤木⁹⁾は、多くの親が子育てを生活の張りとしてとらえ、子どもと共に自分を成長させるものと感じていることについて述べている。柏木¹⁷⁾は、親になることの成長・発達について「柔軟さ」「自己抑制」「運命・信仰・伝統の受容」「視野の広がり」「生き甲斐・存在感」「自己の強さ」の6つの因子を抽出し、子育てを通じた親自身の成長について肯定的結果を得ている。しかし、各自自治体で子育て支援事業が盛んに行われているということは、多くの母親が子育てに不安を抱いているという認識があるからではないか。柏木¹⁹⁾が子育て支援事業について、誰が、誰を、どのように支えるのかといったことが曖昧であることを指摘しているように、子育て支援事業は、子育てを自分自身の成長発達の機会にしたいという母親の期待には必ずしも沿っていないように筆者は考える。

4 親子教室

では、現在の母親にあった子育て支援の条件とは何か。上述したように、子育てを通して母親自身も成長できること、ネガティブな認知傾向を持つ母親を脅かさない場面であること、そして実際に取り入れやすい情報を提供することの3点を満たすことが必要だと思われる。これらの3点の条件を満たす子育て支援として、筆者は親子参加・複数参加・共同注視の形態の親子教室を挙げる。理由として以下に述べる。母親が子どもと一緒に参加する親子参加の形態は、母親自身の学びにつながり、子どもとともに成長している感を持つことができるだろう。他の母子とともに参加する複数参加の形態は、一人ひとりが注目されないため脅かされることなくいられる環境であり、また身近な情報を得られる機会といえよう。さらに講師を全員が注視する共同注視の形態は、直接周囲の母子と関わる必要がないため、コミュニケーションが苦手な母親を必要以上に悩ますことはないだろう。

また、就園後4～6歳児の親子の子育て支援事業の利用率は非常に低いということがベネッセ⁴⁾の調査により明らかになっている。この結果から、就園児を持つ親子は現在の子育て支援からこぼれがちであるといえよう。ところが、4歳児は子どもの性格に個人差が見られるようになり¹³⁾、これまでの子育ての過ちがはっきり見え始める時期⁵²⁾という。また繁多¹⁰⁾は、子どもの個性がはっきりしてくるにしたがって、子どもをそのまま受容できない母親が増加すると論じている。これらのことから、子育て支援の対象として就園児を持つ母子に視点を向けることは重要であると考えられる。

これらの諸条件を全て満たすものとして、親子参加・複数参加・共同注視の形態の就園児の母子対象の親子教室を挙げる。本研究ではそれら条件を全て満たす対象としてY教室をフィールドに選択した。

そこで以下の課題を目的として研究を進めた。

課題 1) 母親は、子育てを通して何を期待しているか。親子・複数参加、共同注視の形態の親子教室での体験において、その期待はどのようにして満たされるのか。

課題 2) 上記のような親子教室に参加することが、子育てを通した母親自身の成長と、親子のより豊かな関係作りに有効に働くのはなぜか。

II 子育てを通した母親の期待

1 研究1 子育てを通した母親の期待についての探索的研究—親子教室での体験から

2 目的 課題1に提示した問題の解を得る

3 方法

表 1 対象者の属性

(1) 対象者

Y教室の同一のクラスに通う、4歳児を持つ7人の母親（選択における留意点：Y教室での体験はクラス全員の子どもにとって初めての経験。親及び子ども同士に強いつながりが出来ていない。基

母親(年齢)	子ども(年齢)	同居家族
A母 (38歳)	A子 女 (4歳 9カ月) 第1子	父親
B母 (39歳)	B子 女 (4歳 6カ月) 第1子	父親
C母 (36歳)	C子 女 (4歳 11ヶ月) 第1子	父親・長男
D母 (39歳)	D子 女 (4歳 9カ月) 第2子	父親・長女・3女
E母 (38歳)	E子 女 (4歳 1か月) 第2子	父親・長男
F母 (39歳)	F男 男 (4歳 3カ月) 第3子	父親・長男・長女
G母 (38歳)	G子 女 (4歳 8カ月) 第2子	祖父・祖母・長女

対象者の年齢はX年5月現在

本的に母親が同伴。子どもの年齢は同一の4歳）対象者の属性は表1の通りである。

(2) 研究方法

Y教室の影響をあまり受けていないと思われる5月（5月がY教室の新学期である）、半構造化面接（15分）を施行して、「親子参加」「複数参加」それぞれに対する期待に関する逐語を採取した。その後、KJ法に基づいて分析した。分析結果の妥当性のため、KJ法について経験豊富な心理学の専門家に指導を受けながら行った。

4 結果

分析結果は、表2、表3の通りである。

「親子参加への期待」については、日々瑣末なことに追われ、母親と子どもがゆったり向かい合う時間がなかなか得られないといった、現在の育児実情を反映した結果が得られた。Y教室での限られた時間を、母親と子どもが密に関われる時間として確保し、その時間を一緒に楽しみたいといった期待が多く挙げられた。

「複数参加への期待」については、Y教室の主目的である音楽教育を効果的に行うために、皆で音楽をする楽しさを子どもに知ってもらいたいという期待が最も多く、続いて日頃はなかなか見ることができない他の母子のコミュニケーションを実際に見てみたい、という期待が挙げられた。また、それぞれのカテゴリー関連図（図1、図2）を作成した。

表 2 『親子参加への期待』についてのカテゴリー一覧表と反応例

カテゴリー	サブカテゴリー	反応例	出現率
音楽の学習のため	子どもに音楽の力をつけるため	・少し弾けたら良いなって ・いろんな方面から音楽に触れられるから良いなって	10.5%
	音楽をしたいという子どもの希望	・ピアノをずっとやりたいって言ってて ・ヤマハもやりたいって。CM見てて	13.2%
	母自身が音楽を勉強できるから	・ピアノが全然弾けないので一緒に勉強できたらな ・楽典とか簡単に教えてくれるじゃないですか。ああそんなのねって	10.5%
	母と子で一緒に復習ができるから	・していることがわかると、家で二人で共通についていける	2.6%

親子の時間を確保	母と子が密に関われる時間が持てるから	・下の子がいるんですけど、なかなか向き合う時間がなかったんで、この1時間がとれることになって ・やっぱり私を独占できるんで、すごい良いことだなんて。いい機会だなんて思ってた。 ・普段なかなか相手をしてあげられないんで。	21.0%
	親子で一緒に楽しめるから	・楽しいのを一緒っていう気持ち ・下の子が一段落して、ちょっと余裕ができて、楽しくできたらいいな ・お母さんが楽しければ子どもも楽しいかな	18.4%
一人だと子どもが心配	子どもが小さいから	・まだ小さいからね	5.2%
	女の子だから	・女の子なんで	2.6%
	子どもを信じられないから	・中で何をしているのかが子どもの口だけでは分からないんで、やっぱり自分で見られるのが良いかなって	5.2%
	親子参加の方がストレスが少ないから	・1人では行けないので、親子二人でストレス抱えるよりは、私が一緒に行ったほうが	5.2%
口実として	下の子を預ける口実として	・ヤマハを通して預けられるので、それを言い訳にして	2.6%
理由なし	たまたま、特に理由はない	・たまたまやる感じなんですけど	2.6%

表3 『複数参加への期待』についてのカテゴリー一覧表と反応例

カテゴリー	サブカテゴリー	反応例	出現率	
「子」に対する期待	子どもの社会教育のため	子どもに集団のあり方を学んで欲しいから	・集団でのあり方とか、そういうのを学んで欲しい	3.0%
		子どもに思いやりの気持ちを育てて欲しい	・できる人できない人に合わせたりとか、思いやりとか、そういう気持ちが芽生えれば	3.0%
		集団の中での我が子を見たから	・自分の子がグループでどんな風に、音楽を聴いているのか見てみたくて	3.0%
	子どもの人間関係を広げるため	皆で仲良くできれば	・皆と仲良くできれば良いなって	3.0%
		皆とだと楽しいから(子の意見)	・皆でやりたいっていうんですね、子どもが。そうだなって思ってた私も	3.0%
		子どもに新しい友達ができるように	・保育園や学校でなく、新しいお友達ができたら良いな	6.1%
	子どもの人間関係を広げるため	友達が行くと言うから	・友人が習うって聞いたんで、習わせよう	3.0%
	効果的な音楽教育ができるから	皆で音楽する楽しさを知って欲しいから	・1人でやるより皆でやった方が楽しいんだよ ・上手くならなくても音楽が楽しいって分かれば良いんじゃないかな ・歌を歌うにしても皆と一緒にだと楽しいし	15.2%
		友達の刺激で子どもが頑張るのではないかな	・お互い刺激しあって頑張れる ・みんなよくやってるな、自分もやらなきゃなっていう気持ちを持って	9.0%
		子どもがグループ向きだと思ったから	・うちの子はグループがあっているんだろうなって感じて	3.0%
子どもに夢中になれるものを見つけて欲しい		・音楽に楽しんで、何かに夢中になれるものを見つけて欲しい	3.0%	
母自身の情報収集のため		母同士の情報交換の場として	・家はこうなんです…って相談したりしながら情報を得られることもあるだろうし ・学校とか以外で知り合いになれるのも良いかな	9.0%
「母」の期待	他の母の行動を見てみたい	・「あ、こんな感じで接しているんだ、他の家は」垣間見れる ・他のお母さんは、こういう時こういう笑顔見せるとか、参考になります ・他のお母さんとか子どもの様子が見れて、刺激になるというか	12.1%	
	母自身、周りにどう映っているか気になる	・自分はどう映っているんだろう、急に気になったり	3.0%	

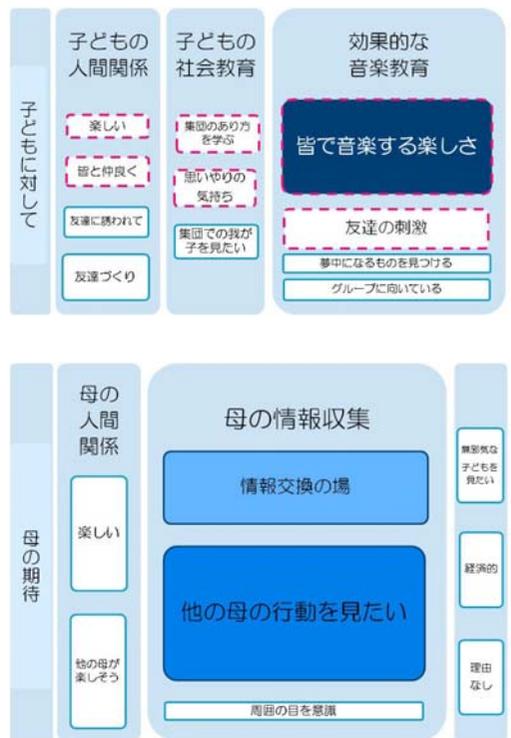
母の人間関係を広げるため	皆とだと楽しいから(母の意見)	・楽しいですね、いろんな人がいるから ・皆でワイワイやれると楽しい	6.1%
	他の母が楽しそうだから	・なんか楽しそうにやってるから、自分も楽しくやりたいな	3.0%
子どもの無邪気な様子が見たいから	子どもの無邪気な様子が見たいから	・幼児のうちに、無邪気な姿を見ることってあまりないので	3.0%
経済的理由	料金的に個人レッスンより安いから	・個人よりは団体の方が安いっていうか	3.0%
理由なし	他者に対して意識していない	・そんなにグループっていう意識はないですね、私と娘がいるっていうだけで	3.0%
その他	母は集団では緊張するがしかなかった	・個人的にはあんまり好きじゃないんですけど、団体行動は	3.0%

図1 『親子参加への期待』カテゴリー関連図



■ 出現率20%以上 ■ Y教室が謳う「親子参加」の効果と共通
■ 出現率15%以上 ■ Y教室が謳う「親子参加」の効果と共通
■ 出現率10%以上 ■ 薄い字 親子参加と関係なし

図2 『複数参加への期待』カテゴリー関連図



■ 出現率15%以上 ■ Y教室が謳う「複数参加」の効果と共通
■ 出現率12%以上 ■ Y教室が謳う「複数参加」の効果と共通
■ 出現率9%以上

5 考察

(1) 母と子が関わる相互交流の場

「親子参加への期待」において、子どもとゆっくり向き合う時間を持ちたいが、なかなか持つことができないでいる母子の現状が多く語られた。小川⁴⁶⁾は幼児期の親子関係について、親子の間には物

理的には距離が出来ていくが、こころの世界ではむしろどんどん深くつながっていくと述べている。しかし、核家族化がさらに進行しつつあるといわれている現代（表1のように本研究の対象者もG母子を除き六組が核家族である）、子育ては「一人で子育てに孤軍奮闘せざるをえないという、母親にとっても子どもにとってもつらい⁴⁴」状況であり、「妻は主婦として、家族員の生命の再生産に関わる家事労働や子どもの養育や老人介護を行い、(中略)外部体系からの要求を満たすことを優先⁴¹」せざるを得ない社会状況であると思われる。このような状況におかれた母親たちは、子どもとの精神的距離を縮め親子の相互交流を望みながら、それを叶えることは家庭内では困難だと感じているようである。

(2) 孤立した子育ての不安からの解放

土岐⁵⁴によると現代は「子育ての責任は、個人としての親にかかってきている時代」であるという。また現代の母親は「親としての経験不足に加えて、人間関係を培う力が弱く、身近に子育ての相談相手を見出すことができないため、孤立した子育ての生活をせざるを得なく⁵⁸」なっており、「子どもの成長発達の遅速に一喜一憂して、客観的に子どもの成長を見守るゆとりを失って」いると大日向⁴⁴は論じている。このように孤立した母親たちは、親だから育児はできて然るべきという世間一般の見方と、自分の育児は果たしてこれでいいのかという不安との間で板挟みになっているように思われる。また、情報は氾濫し、何を取捨選択してよいか判断がつかない現状⁵⁹でもある。「他の母の行動を見てみたい」という期待は、このように身近な情報源を得ることが孤立した子育ての不安から解放される手段であるという母親たちの期待の現われではないだろうか。

III 母子の関係性の改善

1 研究Ⅱ 行動観察を中心とした事例的検討

2 目的

課題2に提示した問題の解を得るために事例検討を行うとともに、「親子・複数参加、共同注視の形態の親子教室における体験は、子育てを通じた母親自身の成長と、親子のより豊かな関係作りに寄与する」という仮説を検証する。

3 方法

(1) 対象者

研究Ⅰで対象とした親子のうち、親子関係に問題があると思われたA、B、Cの3組の親子。

表4 対象者の概要

母親（年齢）	子ども（年齢）	同居家族
A母（38歳）	A子女（4歳9か月） 第1子	父親
B母（39歳）	B子女（4歳6か月） 第1子	父親
C母（36歳）	C子女（4歳11か月） 第1子	父親・長男

担当講師 H（22歳）

年齢はX年5月現在

(対象者の抽出は、以下の調査方法①～⑤から総合的に判断した)

概要は表4のとおりである。

(2) 調査期間 X年5月～10月

(3) 調査方法

対象者を多角的に把握するため、以下の5つの方法を使い、統合的に調査検討した。

- ①「TK式幼児用親子関係検査」⁴⁷⁾：親子関係を客観的に捉える。得られる診断グラフには、親の5つの態度（拒否、支配、保護、服従、矛盾）と10の型（不満・非難、厳格・期待、干渉・心配、溺愛・盲従、矛盾・不一致）が図示される。また親自身、親としての長所の程度を見ることが出来るチェックリストがある。(母親対象)
 - ②半構造化面接：研究Iに加え、母親が主観的に捉えている親子関係について調査する。内容は、母親が捉えている普段の親子関係や子どもの個性についてである。(母親対象)
 - ③「幼児用父母イメージカード」(村瀬³⁷⁾をもとに筆者が作成)：子どもが現在抱いている父母像を調査するとともに、そのイメージと現実生活の関係について考察する。イメージ項目は、村瀬³⁹⁾の研究に則り、賞賛・叱責・看病・交歓・慰撫・交友・保護の7項目であり、それぞれ1枚の図版を作成した。(子ども対象)
 - ④行動観察：Y教室での対象親子のかかわりと、教室全体の関係構造に焦点を当て縦断的検討を行う。X年5月22日より10月23日までの15回、ほぼ週に1回、1時間のY教室のレッスンに筆者が観察者として入った。(母子対象)
 - ⑤半構造化面接・コンサルテーション：補足的な視点を得る。(担当講師対象)
- ①②③⑤は5月と10月に計2回施行し、④は調査期間を通して計15回観察した。

4 事例1：A母子 (概要は表4の通り)

(1) 全体像 表5に示す。

表5 A母子 5月と10月の調査結果

	5月	10月
①「親子関係検査」	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフは全体的に大きく広がり問題は非常に多い。特に「不満」「期待」が突出。 ・理想的な親になるための懸命な努力。 <p><A母は理想的な母親になるよう懸命に努力しているが、その気持ちはなかなかA子には伝わらない></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的問題性はやや減少。「心配」と「溺愛」の大きな減少。態度の一貫性の現れ。 ・理想的な親になるための懸命な努力。 <p><A子の成長を認識し、A子に対して信頼感を持つようになる。態度に一貫性があらわれてくる></p>

②「父母イメージカード」	母：賞賛・看病・交遊 父：叱責・交歓・慰撫・保護 <A子はA母への愛着の度合いが低く、A母を精神的拠り所と捉えていない>	母：賞賛・叱責 父：看病・交歓・交遊・保護 「わからない」：慰撫 <A子にとってA母はより近い存在となりつつあるが、愛着対象は父か母かで揺れ動いている>
③ 親子関係に対して	「やばいですね。やっぱ自分に似てきたのかな」 「周りにあまり相談する人がいないんで、子どもに当たってしまうことがあって、いけないな」 「二人きりでいると精神的にちょっと参っちゃう」 <A母はA子の中に自分自身の欠点を見出し、無意識に不快になっているが、ストレス発散の場もなく、家庭内でのA子との関係に精神的苦痛を感じている>	「前よりかは、密着というか、接するように」 「今までは、子育てっていうか、それから逃げている部分があったんですけど、力をいれるように」 「(A子が) 明るくなった」 <身体がふれあい、ぬくもりを感じるなどという経験から、自然に心の触れ合いも行われ、A母のA子に対する気持ちが変化し、子育てに対し前向きになってきた。またA子の不安も減少した>
④ 親子参加に対して	「私もピアノが全然弾けないので、一緒に勉強できたらなって」 「私は端っこが好きなんですけど、子どもは真中に行きたい。困ってしまう」 <A母は自分自身の夢を叶えたい思いが強い>	「一緒にピアノを弾く時間が増えたり」 「良いですね、豊か」 「(A子は) 以前より積極的にいろいろやりたがる。今は、パレエよりピアノ」 「あとは夫を納得させてピアノを買わせて」 <A母との密接なスキンシップにより、A子はA母の愛情を感じることができるようになった>
⑤ 複数参加に対して	「あんまり好きじゃないですけど、団体行動は。(あんまり好きじゃない)うーん、緊張しちゃう」 「見られているっていう感じで。なんか周りの皆に」 <A母は複数参加に積極的ではない>	「自分を隠さずに打ち明けるようにはして、よくよしないようにはなりました」 「色んなお母さんと友達になれてよかったな」 <一人で抱え込んでいた悩みを打ち明けられる、サポート資源を確保できた>

注) ①②は調査結果をまとめた。③④⑤の「 」内は面接における会話から重要だと思われる部分を抜き出した。また、< >内は筆者の考察である。

(2) 行動観察

A母子のY教室での行動観察の経過(5月～10月)を内容ごとに第I期から第IV期に区切り以下に述べる。

【第I期：大きな声で元気に歌うA子・緊張しているA母(＃1～＃3、5月22日～6月5日)】

Y教室が始まってから、約1ヶ月の期間である。A母はA子の方を見ることなく、何も言わない。頻繁なあくび。A子はA母のことなど気にも留めず、元気いっぱいであり、周りをキョロキョロ見回していた。

集団が苦手なA母は、どう行動して良いか戸惑ってしまい、なすすべなくじっとしているようだった。A子はそんなA母のことなど、まるでおかまいなしといった様子で自由にふるまっていた。

【第II期：不安定なA子(＃4～＃7、6月12日～7月24日)】

A子の機嫌の良し悪しが毎回変化する。＃4ではふくれっ面、＃5では笑顔、＃6では泣き続け、＃7では再び笑顔。どの回でもA母の方を向くことはない。機嫌が悪いA子に対しA母は、A子を見ることはしないが表情は柔らかい。

A母は5月の段階で、A子と『早くしないと遅刻しちゃう』…塾通いのあれでケンカとかよく」と語っていたが、#4、6ではおそらく出かける前に母子で言い合いでもしていたのではないかと。A子は機嫌が悪かった#4、6において、ふくれていても泣いていても母の方を見なかった。このことは5月の「父母イメージカード」において「慰撫」の項目を母親のイメージとして捉えていなかった、つまりA母を心のケアをしてくれる存在ととらえていないことの可能性が示唆される。また、A子の機嫌が悪い回と、機嫌が良い回が交互に現れることから、この時期A子の気持ちが不安定なことが考えられる。

【第Ⅲ期：甘えるA子・甘えさせられないA母（#8～#12、7月31日～9月25日 ただし、#9、11はA子の発熱のため欠席）】

幼稚園は夏休み期間であるがY教室は通常通り。A子がA母の顔を見て微笑む様子が見られるようになってきた。#8ではA母をふざけてつく。#10では、A母とぎゅっと手をつないで元気いっぱいリズムを取ったり、A母の目を見てにっこりとうなずく。#12では母の膝の上に乗る。A母はそんなA子に対し、微笑を浮かべ、服の乱れを直したりするがスキンシップはとらなかった。

A子は頻繁にA母の反応を確かめるような行動をとるようになった。一方A母はA子のスキンシップに対しスキンシップで答えることができず、A子に伝わるような愛情表現がうまくできないようだった。筆者にはA子はA母の愛情の確信を得るために、さまざまな行動を起こしているように思われた。

【第Ⅳ期：積極的なA子・愛情表現をするA母（#13～#15、10月2日～23日）】

およそ半年たった。A子はA母の顔を見つめ微笑んでいることが多く、A母に甘えるような行動も増加してきた。#13ではA母に頼んでテキストを開いてもらい、#15では「涙が出たー」と言ってA母に何度か拭いてもらっていた。#14でA子が演奏に失敗したとき、A母は黙って“大丈夫だよ”というような表情で大きくうなずいていた。お互い顔を見合わせてくすくすと笑って肩をすくめるといった場面も見られた。加えてA母は声を出してA子を褒めたり励ましたり、髪をなでてあげることもあった。

A子のA母に対しての働きかけはより積極的になり、A母も積極的に対応できるようになってきたようだ。A子のスキンシップに対しA母のスキンシップも増え、また、眼と眼で気持ちを通わせている#14から、A母からA子への自然な形での愛情表現の発露がうかがえた。また、髪をなでる行為は他の親子のやり取りを見たことによるモデリングと思われ、複数の親子の存在がA母にとって有意に働いていたことが示唆される。

（3）事例1のまとめ

事例1：A母子について以下にまとめる。

5月当初、A母はA子の中に触れたくない自分自身の欠点を見出し、A子に対し漠然とした不満や

不快感を無意識に抱いていたようであった。また理想的な親になろうというA母の懸命な努力のいかにもなく、その愛情はA子に伝わらず、A子はA母に愛着を持つことができないでいた。A母子は家庭の中で精神的に行き詰っていたものと考えられる。家庭からの逃げ場として通い始めたY教室において、A子はA母の反応を見るような様々な行動を試みたが、それに対しA母は戸惑うばかりであった。しかし半年後お互いのスキンシップが徐々に増え、ついに眼と眼で通じ合える関係になりえたといえる。

A母はA子との触れ合いを通じて、A子に対する愛情を再認識し、正面からA子と向かい合おうという積極的姿勢をとるようになったと思われる。また自分へのA母の関心を感じ始めたA子は、不安が減少し、明るく積極的な子どもに変化してきたようだ。加えて、A母は悩みや不安を打ち明けられるサポート資源を獲得できたと考えられる。

以上のようにY教室での様々な体験を通して、A母においては育児に対する苦痛や行き詰まりが解消し、育児に積極的に取り組み、仲間というサポート資源の獲得ででき、A子もA母の愛情をしっかりと受け止めることができるようになったと考えられる。よって仮説は検証された。

5 事例2 B母子（概要は表4の通り）

(1) 全体像 表6に示す。

(2) 行動観察

B母子のY教室での行動観察の経過（5月～10月）を内容ごとに第I期から第IV期に区切り以下に述べる。

【第I期：緊張しているB母・リラックスしているB子（#1#2、5月22日、29日）】

1カ月目である。B母は笑顔を浮かべているものの、表情は硬い。B子は元気いっぱいであり、B母の顔をニコニコと楽しそうに見つめていた。

B母の笑顔は張り付いたように見え、視線も定まらず、余裕がないように思われた。そのようなB母と、元気いっぱいのB子は、対照的に感じられた。「B子は激しい人見しり」とB母が語っていたことが筆者には嘘のように感じられた。

【第II期：講師を見つめるB母・母が気になるB子（#3～#6、6月5日～7月3日、ただし#5はB子の風邪のため欠席）】

2か月ほどたった。B母は講師の指示を一言も聞き逃すまいとしている様子であった。視線はいつも講師の方を向き、B子に話しかけられても顔を向けることはなかった。B子は、#3ではB母が自分を見てくれなくても、その顔をニコニコと見つめていた。#4では周囲をきょろきょろ見回し、自

表6 B母子 5月と10月の調査結果

	5月	10月
①「親子関係検査」	<p>・保護的傾向が強い。「厳格」と「心配」はかなり、「矛盾」はやや問題が多い。「盲従」は問題性が少ない。</p> <p>・しっかりとしたしつけ。心身の余裕がなくB子の成長や変化に気づくことができない。</p>	<p>・保護的傾向が強い。「不満」「厳格」「矛盾」の問題性が減少。「期待」「溺愛」はやや問題性増加。</p> <p>・B子の良いところや、子育ての楽しさへの気付き。</p>
②「父母イメージカード」	<p>母：賞賛・交遊 父：交歓・慰撫 祖母：叱責 祖父：看病・保護</p> <p><祖父母がB子の生活の基本的基盤に大きな影響力を持っている。このことは、B母にとっての両親が脅威的存在であることを示唆する></p>	<p>母：看病・保護 父：叱責・慰撫・交遊 祖父：賞賛・交歓</p> <p><B母の存在感は増し、祖父母の影響力は減少した></p>
③親子関係に対して	<p>「こんなに人見知りが多い子はいない」</p> <p>「私も人見知りが激しかったって（自分の両親から）言われてきた…言われてきて嫌だから、あまりそれを（B子に）意識させたくない」</p> <p>「自由にして欲しいと思う反面、言ってしまう自分もいて」</p> <p>「主人に言っても場面を見ていないんで」</p> <p><B母は自分が両親から受けた嫌な思いと同じ思いをB子にはさせたくないと思っているが、結局は同じことをしてしまっている自分に対し、葛藤している。また、夫のサポートを得られていない></p>	<p>「（自分から）ちょっと離れることもあるように」</p> <p>「たくましくなったなって。お姉ちゃんになったな」「私は別に家で甘えるのは、いいって言うか、そういうところもないと」</p> <p>「（幼稚園から）帰ってきた位に（主人から）電話掛かってきて、今日はどうだったって」</p> <p><自分の意思で行動するようになったB子に対し成長を感じている。自分に似たB子の人見知りな性格も、余裕をもって受け入れる姿勢に変化した。夫が子育てに対して協力的になる></p>
④親子参加に対して	<p>「2人がストレスを抱えるよりは、私が一緒に行ったほうが」</p> <p>「子どもは良いように自分を言うんで。都合が悪いのは言わないんで。私が期待するようなことを、望んでいることを」</p> <p><母子二人で顔を突き合わせる毎日。B母はB子を管理下に置くことを望み、B子はB母に依存し、自由に動くことをしない></p>	<p>「会話がありますよね。一緒に歌を歌ったり」</p> <p>「こっちがちょっと教えようとしたら、すごい嫌がるんですよ。レッスンの途中で。すごい嫌がって、恥ずかしがって、こう怖い顔して睨むんですよ。家だと普通に聞くんですけど」</p> <p>「あんまり言わない方がいいのかな」</p> <p><B子はB母に対し、自分の意見を述べるようになった。B母はB子を管理下におこうとする自分自身の態度について、反省して振り返っている></p>
⑤複数参加に対して	<p>「グループって言う意識はないですね。私と娘がいるってだけで」</p> <p>「他のお母さんは、こういう時にはこういう笑顔見せるとか、そういうのは参考になります」</p> <p><B母は周囲を見回す余裕がない。他の母子し接する機会が少ない></p>	<p>「知らなかった人と友達になれて」</p> <p>「他のお子さん見て、あ、このくらいできるんだな」</p> <p><他の母親たちと友達になる余裕が生まれてきた。実際に他の母子を見ることで、刺激を受けている></p>

注) 事例1を参照

分のすべき行動をB母の顔を見て確認していた。#6では講師と会話するB母の顔をちらちら見ながらおとなしく座っていた。またB母子の座る位置は常に最前列であった。

講師の指示を守ることがB母にとっての最重要課題であるように思われた。周囲の様子はもちろん、B子を見る余裕すらないように思われた。B子はそのようなB母の態度に敏感に反応したように、#

3でニコニコしていたが、#4では不安げに、#6ではB母の顔を伺うように、B母に合わせるように変化してきた。

【第Ⅲ期：要求が高いB母・講師を見つめるB子（#7～#11、7月24日～9月11日 ただし#9は帰省のため欠席）】

幼稚園は夏休みである。B母はB子が他の子ができないような難しい課題ができたときだけ褒め、それ以外はB子の顔を見ることもしなかった。また、#10、11でB子が失敗した時、B母は恥ずかしそうな表情でパッと講師の顔をのぞいていた。B子はB母の顔を見ず、講師をじっと見つめていた。またB母に甘えるそぶりも見せなかった。

B母のB子に対する要求水準が上がってきたようだ。第Ⅱ期では他の親子の存在をあまり意識していないように見えたが、それは自分とほかの親子との差別化の表われとも考えられる。また、実家の両親に脅威を感じていると思われるB母は、講師という立場の人間に対しても、同様に脅威を感じているのかもしれない。一方B子はB母の期待するような行動をとっていた。

【第Ⅳ期：相変わらず高い要求のB母・B子のチック（#12～#15、9月25日～10月23日）】

半年たった。B母は相変わらず講師を見つめ、B子が難しい課題ができたときだけ笑顔を向けていた。B子は、常に講師の顔を見て、指示通りに行動していた。たまにB母の方を見ることもあったが、表情はなかった。#12でB子の右目に、#13では両目に、#15で右目にチック症状が見られた。

B母がB子にこっそり正解を教えている場面が見られた。これはB母自身が「良い子」でいるための努力のように感じられた。そのようなB母を見てB子はより「良い子」であるために頑張っていた。しかしチック症状の出現など、どこかに無理が生じているように思われた。

（3）事例2のまとめ

事例1：B母子について以下にまとめる。

5月、B母は、人見しりのB子の中に自分自身を投影し、無意識に拒否しつつも、必要以上に過度な心配をするというアンビバレンスな感情を抱いていたように思われる。一方B子は常にB母や周囲の様子をうかがい、不安や緊張が高かったようだ。またB母の期待を敏感に感じ取り、それに沿うような「良い子」であろうと努力していたと考えられる。精神的にはB母に対する愛着の度合いは低かったようである。

B母の講師の指図に常に忠実であろうとしている姿は、講師に褒められる＝親に褒められるというB母の認知から生じているように筆者は読み取った。またB母はB子に対する要求水準を次第にあげていくが、B子はチック症状を呈しつつもそれに応えていった。しかし、10月になってB母の語りに見られたように、B母の要求にB子は「怖い顔をして睨む」態度をとり、自分の意思をB母に表明するようになった。このような意思表示は、B母がB子に望んでいながらも叶えることができなかったものである。B母はB子の態度をきっかけに自分の子育てに対する自信を取り戻していった。B子に

対する信頼も増加し、今までは許せなかったB子の人見しりを受容できるようになった。また、夫のサポートも得られるようになったことで精神的余裕も生まれ、今まで存在さえ意識できなかった他の親子と、友達関係を作れるようになった。またB子にとってもB母の存在感が増したと思われる。

以上のように、Y教室での様々な体験を通して、B母の育児不安は軽減し、B母子の親子関係は高い緊張状態から解放されつつあると考えられる。よって仮説は検証された。

6 事例3 C母子（概要は表4の通り）

（1）全体像 表7に示す。

表7 C母子 5月と10月の調査結果

	5月	10月
①「親子関係検査」	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフをみると全体の問題性はかなり少ない。 ・C子のことをよく知ろうとしているが、逆に自分自身のことをC子に知らせようという意識が薄い。 <p><ここでの結果は問題性はないと考えられるが、担当講師と筆者の行動観察から、C母子の笑顔のなさには特筆すべき点があると思われた></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフをみると全体の問題性はかなり少ない。 ・C子を家族の大切な一員として捉え、尊重するように変化してきている。
②「父母イメージカード」	母：看病・交遊 父：叱責・保護 祖母：慰撫 先生：交歓 友達：賞賛 <C子の母親イメージは拡散している>	母：看病・交歓 父：交遊・慰撫 祖父：叱責 友達：賞賛・慰撫 <C子に対するC母は、より自分に近い存在となってきた>
③親子関係に対して	「ちょっと前までホントにストレスがたまっていて、それがそのまま出ちゃいますね、子どもにも」 「私が言っても（C子は）なかなか聞かなかつたり」 「よその家族も仲良さそうで、うちもそうならうみたい。正直、あ、怒ってばかりじゃつまらないな」 <C母の日々のストレスのはけ口がC子に向かっていた。しかし、自分が変わればC子も変わること期待を感じ始めていた>	「やっぱ、変わりますね、私の接し方で、子どもの笑顔も増えますね」 「でも（C子が）楽しんでいるのはすごいうれしかった。」 <C母は、C子を客観的に見ることができるようになったことで、C子の成長を発見できた>
④親子参加に対して	「下の子がいるんですけど、なかなか向き合う時間がなかった」 「この1時間がとれることになったので、子どもにとっても私にとっても、なんだろう、こう、今まで感じられなかった何かを感じられれば良いな」 <C子と向かい合う時間を持つことで、何かを感じることを願っている>	「子どもと二人きりの週に一度、こういう時間があって。二人でできる時間でなかなか取れないので、そういう面では良かった」 <5月の段階での期待がかなえられた>

<p>⑤ 複数参加に対して</p>	<p>「他のお母さんとか、子どもの様子が見れて、なんか刺激になるというか、なんか楽しそうにやってるから、うーんなんだろう、自分も楽しくやりたいなあ」 「あっ、こんな感じで接しているんだ、他の家は」そういう感じで。垣間見れるので」 「自分はどうか映っているんだろう、急に気になったり」 <Y教室で初めて他の母子のコミュニケーションを目の当たりにした。自分自身を振り返る機会ともなった></p>	<p>「(Y教室入会当初は) すごい内心怒ってた時期なので、その時すごい周りが気になっていましたね」「周りがそんなには気にならなくなりました。今は余裕が出てきたって言うか。その時はちょっと行き詰まっていたのかもしれないんですけど」 「ほんのちょこっとなんですけど、こんなことがあった、とか話すことで何か落ち着きますね。みなさんどの子にも笑顔で迎えてくれるので、そういうのがうれしかったり、自分の子と同じように見てくれるっていうか、他の子も。ありがたい。仲間というか」 <C母は自分自身を客観的に見つめなおすことができるようになった。他の母たちという仲間を獲得することで、孤立感から抜け出せた></p>
-------------------	--	--

注) 事例1を参照

(2) 行動観察

C母子のY教室での行動観察の経過(5月～10月)を内容ごとに第I期から第IV期に区切り以下に述べる。

【第I期：きょろきょろするC母・無表情なC子(＃1～＃5、5月22日～6月19日)】

約1カ月半の期間である。C母は必ず教室の端の席に座り、周りを見回していることが多かった。C子と向かい合う場面でも視線はC子ではなく周りの講師や他の親子に向いていた。C子は、＃1～5を通して無表情で他の子どもとの会話もなかった。

初めての習い事のせいかC母は緊張し、不安な気持ちを抱いていたようだ。C子はC母からの賞賛や交歓を期待していないように思われたが、これは5月の段階での「父母イメージカード」の結果と符合する。

【第II期：積極的に関わるC母・とまどうC子(＃6～＃9、7月3日～8月21日)】

幼稚園の夏休み期間である。第II期を通して、C母は他の子どもを褒めたり、声を上げて笑うことが多かった。＃6、7ではC子を大げさに褒めるなど、C子に対し積極的に働きかけていたが、C子は無表情でC母と視線も合わせなかった。しかし＃8でC母と向かい合って歌う場面で、C母に一度だけ笑顔を見せた。これは筆者がはじめて見るC子の笑顔である。＃9になると、C母は他の子どもには笑顔を向けるが、C子の顔を見たとき無表情になることが多かった。一方C子は無表情ではあるが、C母にくっついて甘える様子を見せるようになった。

C母は他の母たちと比較してより積極的に周囲と関わろうと努力しているようであった。しかし積極的過ぎたのか、＃6でC子に「バシッ」と顔を叩かれてしまった。これはC母の大きな変化に驚いたことに対するC子の反応かもしれない。周囲への働きかけに夢中になるあまり、C子に対し不適切な行動を取ってしまったと考えられる。一方C子により笑顔が見られるようになった。

【第Ⅲ期：周囲に積極的なC母・笑顔のC子（#10～#13、9月4日～10月2日）】

5カ月ほどたった。C母は引き続き周囲に積極的に関わっている。#10, 11, 13では他の母たちと積極的に会話をしていた。C子の笑顔も徐々に増えてきた。C母を見てニコニコしたり、課題が上手にできたときや失敗してしまったときC母の顔をパッと見たり、くっついて甘えることもあった。しかし#12では初めて連れて来た弟のことで精いっぱい、C母はC子に笑顔を向けることはなかった。C子は無表情に戻り、C母の顔を見ることは1度もなかった。#13ではC子に再び笑顔が戻った。そして講師の問いかけにC子がまっさきに挙手した姿を見て、C母は驚き、喜んでいた。その後、C子はC母にもたれて甘えていた。

第Ⅱ期で、C母のあまりの積極性に戸惑っていたC子だったが、第Ⅲ期では慣れてきたのか、C母に笑いかける回数が増え、スキンシップも取るようになった。#12の弟の登場で、ようやくできてきた親子の相互交流が振り出しに戻ってしまうのではと筆者は危惧を抱いたが、#13で再びC子に笑顔が戻り安心した。

【第Ⅳ期：笑顔のC母・ふざけるC子（#14, #15、10月16日、23日）】

半年たった。C母は今まで同様、笑顔を絶やさない。C子は友達と楽しそうにふざけることが多くなった。そのようなふざけるC子に対してC母は叱らずに、笑顔であった。講師はそのようなC子に対し「意外でした」と語っていた。また、C母子の間のスキンシップも増加した。

（3）事例3のまとめ

事例1：C母子について以下にまとめる。

5月、Y教室入会直後のC母子の表情は、硬くこわばっていた。C子は常に無表情であり、C母は緊張し不安げな様子だった。C母は、C子と関わりC子を理解したくても、毎日の生活に追われ、できない状態だったようだ。そしてそのような自分に対してストレスを感じていたように思われる。C母はY教室を通して何か「変化」を期待していたようだった。

C母は周囲の様子は気になるようだが、笑顔が徐々に増えてきた。また「変化」に対する強い期待からか、周囲に対し積極的に関わるようになった。C子はそのようなC母の変化に最初は戸惑っていたようだったが、少しずつ慣れて笑顔が見られるようになった。表情、行動共にリラックスしてC母とのスキンシップを楽しむまでになったように思われる。

C母はC子と向かい合う時間を確保したことによって、C子と密な関わりを持つことができた。そしてC子の成長や、自分の接し方次第でC子の笑顔も増えることに気づいたようだ。また、他の母子のコミュニケーションを見たことが自分自身を客観的に振り返るきっかけになったようだ。わずかな時間だが他の母親たちと関わるのが、C母にとって「仲間」の存在を感じさせ、「孤立感」から抜け出す大きな支えになったように思われる。一方C子にとってC母は、喜びを分かち合う存在になっていったようだ。

以上のように、Y教室での様々な体験を通して、C母の密室育児によると思われる育児不安は軽減し、C子を大切な家族の一員として尊重して受け入れることができるようになったと考えられる。よって仮説は検証された。

7 考察

それぞれの事例について臨床心理学的および発達心理学的視点からの考察を述べる。

(1) アタッチメントの変化

始めに事例1：A母子について、アタッチメントの変化を主題に考察する。

Ainsworth et al.¹⁾によると、養育者との分離場面における子どもの行動特徴は、Aタイプ(回避型)、Bタイプ(安定型)、Cタイプ(アンビバレント型)の3つに分類される。その中のAタイプは、養育者との分離に際して、さほど混乱・困惑した様子を示さず、再会時にも養育者を喜んで迎え入れる様子が相対的に乏しい子どもである。遠藤²⁴⁾は、「このようにAタイプの子どもは一見、養育者との分離にはほとんど混乱を示さないように見えるが、その心的状態は、養育者との分離に際して相当に大きなストレスを経験し、常時、養育者の存在や位置を気かけ、不安や苦痛に満ちている」と述べている。一方Aタイプの子どもの養育者は、全体的に子どもの働きかけに対して拒否的にふるまうことが多く、他のタイプの養育者と比較して、子どもと対面しても微笑むことや身体接触することが少ない。そして子どもが苦痛を示していたりすると、かえってそれを嫌がり、子どもを遠ざけてしまうような場合もあるという。Aタイプの母親について遠藤²⁵⁾は同著の中で、「子どもとの関わり・接触をあまり持とうとしないように見えるが、むしろ子どもに関わりすぎ刺激を与えすぎる傾向を持つため、子どもからポジティブな情動表出を引き出しにくくなり、喜びや効力感といった社会的報酬をあまり受け取ることができなくなる」と論じている。A母子にもAタイプの特徴が読み取れる。A子はA母がまるで存在していないかのように行動する一方、A母に対する攻撃的・反抗的態度が見られた。A母は理想的な親になるために懸命な努力に関わらず、その気持ちはA子に伝わるのは難しいようだった。数井²⁶⁾は、「アタッチメント軽視型の養育者は、自身のアタッチメントにまつわる不快な記憶を活性化させるような乳幼児のネガティブなアタッチメントシグナルを知覚から排除するようふるまう。つまり、潜在的に、表象空間内でのアタッチメント対象への近接を拒んでいると考えられ、アタッチメントの重要性を低く認識しているといえる」と述べているが、これはA子に関心を示さない消極的で非協力的なA母の態度から示唆される。A母は自分やA子を否定的に語ることで、A子のアタッチメント欲求を退けることを可能にし、それを正当化していると考えられる。

Y教室での体験によって、A子がそれまでの回避型のアタッチメント行動を変化させA母に積極的に身体接触を求めるようになった。それに対応して、A母もA子の働きかけに対してより敏感になりA子との身体接触を楽しむようになった。そしてA母はA子の育児に積極的に、さらに周囲に対しても同様に積極的に自らを開いていくように変容していった。その結果A子のアタッチメントもAタイ

プ（回避型）から、徐々にBタイプ（安定型）に、A母の養育行動も拒絶型から柔軟型、アタッチメントも軽視型から安定型へとそれぞれ変質しつつあるように思われる。

（2）親子の発達課題

次に事例2：B母子について、発達課題の側面から考察する。

4歳という年齢についてPiaget,J.は、「前操作期」の中の「直感的思考段階」に位置づけられ、社会性や言葉による意思の表出の発達から生じる仲間関係は、より豊かな社会的理解をもたらすと述べている。Erikson,E.H.⁶⁾は、「幼児期後期」として位置づけ、次のような発達課題を抱えていると述べている。この時期は自発性の感覚が芽生え、より自分らしく自分の行動を表現するようになるが、うまくいかないと、自分の行為に対して、「失敗した」という感覚を持ち、罪悪感を抱くようになるという。岸²⁶⁾は、罪悪感による自己規制で「自分自身についての肯定的感覚や自尊心さえ持つことができなくなる」場合があると論じている。母親たちの世代については、Erikson,E.H.⁶⁾が同著の中で、「成人期」として位置づけ、「世代性 対 停滞」といった次代を背負う世代の養育という社会的責任が課題であり、いたわり、ケア、養育などを発揮する生活の確保が重要であると述べている。Carter and McGoldric,²⁾の研究によると、母親たちの世代は、一般的・典型的家族システムの中の第3段階「幼児を育てる時期」に該当し、発達課題として親役割の受容や、実家との新たな関係の確立などがあげられるという。B子は、人見しりでB母のもとを離れられず、B母の期待通りの行動を取っていた。このことからB子の罪悪感が自由な世界の形成を妨げていたことが示唆される。一方B母は、自身が親になっても、実家の両親とは子どもの頃の関係そのままであり、両親を脅威に感じ続けていたと思われる。

次にMinuchin,S.³⁵⁾が提示した家族システムから考える。家族システム概念の中のサブシステム間の境界の1つである「拡散した境界」の家族について平木¹¹⁾は次のように述べている。「自律、自立、自由な試みなどが侵され、自分の能力を自由に発揮することができない。その結果、子どもは自由に動くことを恐れ、成功することも失敗することも避けるだろう。拡散した境界にいる者同士は、自分と他者の感情を区別することができず、子どもはいつまでも幼稚で、家族以外の人との関わりに不安を持つ」。この特徴は、5月の時点の、人見しりなB子と、そのようなB子に自分を投影しているB母との関係と合致しているように思われる。B母は常にB子を自分の管理下に置き、B子は自由に動くことを望んでいなかった。しかし10月、一人の人間として自分を表現したB子を目の当たりにしたB母は非常に驚いたと考えられる。しかし周囲の目があるため、冷静に客観的にB子の変化を受け止めることができたのではないだろうか。その結果、親子の境界が次第に明確化してきたと筆者は読み取る。

母と子の2人だけの生活、B母の育児に対するさまざまな葛藤、母子の拡散した境界、これらを背景に生じてくるB母のB子に対する評価と制限がB子に当惑をもたらし、Erikson,E.H.⁶⁾が論じてい

る幼児期後期の発達課題がB子には肯定的に解決されず、自分の自発性を規制し、自由な世界が形成されなくなっていたと考えられる。しかし、Y教室の親子参加の場面でB母B子ともにそれぞれ講師との関わりを持ち、複数の仲間関係の存在によってB子の社会的発達が徐々に促され、B子の自発性が表現されるようになった。そしてB母は、B子に対する評価を肯定的に変化させ、個性ある個人として認めるようになり、さらに自分自身の評価も肯定的になってきたと考えられる。

(3) 密室育児からの出立

最後に事例3：C母子について密室育児の問題から考察する。

現代の育児状況について、土岐⁵⁵⁾は、「子育ての責任は、個人としての親にかかってきている時代である」と述べ、神原¹⁶⁾は母親一人が子育てに孤軍奮闘していることについて論じている。また、長時間孤独な状態で幼い子どもと居る専業主婦は、仕事を持っている母親よりも、子どもに対しマイナスの感情を生みやすいことについて、柏木²³⁾、興石²⁹⁾が指摘している。

事例3から、近隣との付き合いのほとんどないC母の孤独感が読み取れる。C母は家の中で下の子の世話に振り回されながら家事に追われ、C子はそんなC母から小言ばかりを浴び、やさしい笑顔向けられることもなかった。家庭という密室の中で、C母は自分の育児に対して不安やあせりを感じ、一人で育児を担う心身の疲労から、C子の成長を客観的に見守るゆとりを失っていたのだろう。そしてそのような自分に対して苛立ち、C子の存在そのものさえ受け入れることが困難になっていたのではないだろうか。しかし、心のどこかで「何か」変化を望んでいた。子育てだけで毎日が過ぎて行っているのか。家事や育児に支障がなく、時間的にも経済的にも負担がなく、やりがいのある「何か」はどこにあるのか。自分が本当にやりたい「何か」。永久⁴⁰⁾は、その「何か」とは専業主婦自身のあせりであると論じている。そのあせりとは、母親以外の個人としての生き方を模索しているあせりだと筆者は考える。C母は家庭という密室の中で、個人としてC子と向かい合うことができずにいたのだろう。しかしY教室への参加をきっかけに「密室」から飛び出し、個人としての自分、同じく個人としてのC子との新たな関係に向かってスタートできたと思われる。個人としての生き方を模索するC母の姿は、悩みつつもいきいきと楽しむ姿としてC子に映り、二人の笑顔へと結びついたらと筆者は考える。また、他の母親たちの存在自体がC母にとって社会との大切な接点となり、仲間として関わることができるようになったことも、密室育児からの出立のきっかけになったと思う。

IV 総合的考察

I章で掲げた2つの課題に対して行った研究結果をまとめて論じ、総合的に考察する。

1 課題1について

親子教室での体験を通して母親は、子育てにおける母子相互交流の時間を確保し、孤立した子育てからの解放を期待していることが明らかになった。では、そういう期待を持つ母親たちの現状と、その期待がどのように満たされていくのかについて以下に述べる。

(1) 自信のない母親

現代、主婦の家事労働が軽減した¹⁸⁾ことに加え、少子化も進み、母親が子育てに費やすことができる時間は増加しているように思われる。またベネッセ³⁾によると、約90パーセントの母親たちが子育てに対し、親自身とともに成長していくものという感情を持っているという。しかし柏木²¹⁾は、一方で母親たちは子育てに対し否定的感情や行動も併せ持っており、専業主婦の間では特に強いことについて論じている。時間的ゆとりがあり、子育てに対し肯定的感情を持っているにも関わらず、母親たちはなぜ母と子の相互交流はできていないと感じているのだろうか。興石³⁰⁾は、日本の母親は「外に基準がある」と述べ、田中⁵⁰⁾は、「外からの情報に左右されずに目の前のわが子を見る、ということは、自分自身の目を信じることであり、それは自分自身を信頼できて初めて、可能になることであろう。しかし今、母親たちは自分の目を信じることができないでいる。」と論じている。このように母親たちは子育てのみならず自分自身にも自信がなく、どこかに存在する‘良い母親という理想像’通りにやらねばという思いを抱いているように思われる。母子相互交流に対する理想は高いが、その通りにできない自分にネガティブな感情を持ってしまい、それゆえに母子相互交流を楽しむことに対し母親たちは困難に感じているのではないだろうか。

(2) 観察学習の機会

母親たちにとって‘外の基準’とは得難いものであるが、氾濫する情報のなか何を取り入れるべきか判断がつかず⁶⁰⁾、母親同士の表面的おしゃべりでは本当に知りたい子育ての情報を得ることができない¹²⁾のが現状であろう。田中⁵¹⁾は、大切なのは方法論ではなく「ありのままに」わが子を見る客観的視点を得ることだと論じている。ところが現代のような核家族の少子家庭では母と子の1対1の貧弱な人間関係しか得られないため、そういった視点を得ることは家庭内では非常に困難であると思われる。柏木²²⁾は、母親たちが子どもや子育てについて観察学習することで、教えられなくても見ることだけで学ぶことができ、それによって抱えている子育てに関する悩みや心配ごとが軽減できたという調査結果を報告している。教わるのではなく、他の母子の自然な関わりを見、そして観察することで学習し自分自身の子育ての糧にすることが、我が子を「ありのままに」見ることへの第1歩となるのではないだろうか。他の母子のかかわりを観察することによって、母親のわが子を見る客観的視点や、子育てへの自信が獲得されていくと考えられる。

2 課題2について

親子教室での体験を通したさまざまな経験が、子育てを通した母親自身の成長と、親子のより豊かな関係作りにどのように有効に働くのかについて以下に考察する。

(1) 親子教室の持つ「守られ感」

第1章でも述べたように、日本社会には母性神話が根強く残っており、母親たちは子育てに対して責任を持たされ非難され、精神状態が悪化してしまう状況におかれている。また思い通りの自己実現を目指してきた母親たちは、子育ても思ったとおりにできるのが当然であり、そこでの結果はすべて母親たる自分の責任であると受け取る傾向もあるように思われる。母親たちは、現実の子育てが理想と異なっただけで「失敗した」と感じ、子育てに対し周囲から指摘されると、自分自身を否定されたような感覚さえ抱いてしまうようだ。子育てに不安を抱えている母親は、自己のネガティブなところに注目するため自己評価が低下し、ネガティブな情動を持ちやすく、ますます不安や苛立ちを募らせる結果になると奥石³¹⁾は述べているが、その結果として罪悪感を抱き、ついには自分自身についての肯定的感覚や自尊心さえ失ってしまうのではないかと筆者は考える。

このように失敗への耐性が少ない母親たちにとって、自分の子育てに対する直接指摘がない場合は、安心できる場であると考えられる。親子教室は「子どものため」の「教育の場」である。主体が子どもであることから「子どものため」という大義名分が立ち、付き添いとしての母親は直接指摘を受けることはまずない。また「教育の場」であるため、そこでの指摘は子どもの教育についてであり、母親の子育てそのものを直接脅かすものではない。さらに一人の講師対それぞれの母子という共同注視の形態なので、周囲との複雑なコミュニケーションを経験する必要がない。以上のように親子教室において、母親は自分が抱えている不安感を前面に出さずに済むため、それを周りに知られる心配もなく、守られ感を持ち安心して子どもと向かい合うことができると考えられる。親子教室は母親たちにこのような何重もの「心理的防衛」を与え、その存在によって母親たちは、子育てを通した自分自身の成長と親子のより豊かな関係をようやく獲得することができるのではないだろうか。

(2) 子育て不安の悪循環の予防

以上、子育てを通した母親自身の成長と、親子の豊かな関係作りについて、親子教室での体験から考察してきたが、第3章の事例研究を通して得られた、子育て不安の悪循環の予防について考えてみたい。

奥石³²⁾は子育て不安を軽減するため、母親に対する方略として次の3つを挙げている。

1. 自分の育児行動パターンを知り、理解する
2. 自分の育児行動に対するネガティブな認知結果を解釈し直す
3. ネガティブな気分から注意をそらす

親子教室は、育児不安の軽減を直接的に謳っているわけではないものの、本研究の結果から、そこでの体験の中で、母親たちにとって輿石³³⁾が指摘した上記の対処が自然に行われ、子育ての悪循環を予防する機能をも有することがわかった。

(3) 子育てを通した自己実現

では、母親たちが望む子育てを通した自分自身の成長とは何か。大日向⁴⁾は、「家庭の中で子どもとしか向き合うことのできない生活は、自らの努力に対する評価や達成感を得にくい」と、武田⁴⁹⁾は、「あなたは自分を大切にしているのですね」と言われて初めて、自尊心を持っていいことに気づく母親が少なくない」と、子育てをしている母親が自尊心を持ちにくい状況に置かれていることを述べている。また永久⁴¹⁾は上述したように、母親以外の個人としての生き方も模索し、何かを探し、漠とした焦りを感じている現代の母親について述べている。高石⁴⁸⁾は、現代のような個人主義の社会において、「個人の自己実現の手段としての子育て」という部分に、最も価値が置かれるようになったと同時に、「母親たちは、子どもを産み育てるのは「自分のため」という意識を高めていながら、実は欧米のような自立した“個”を持たないために、子育てを通した自己実現を楽しむことができないのではないか」と述べている。そこには母と子の人間同士としての相互交流を切望しているのにもかかわらずそれが実現できないため、自分自身や自分の育児に対して漠然とした不安を抱えている母親像が浮かび上がってくる。それは“個”を持たない、つまり個人として尊重されるべき自分というものを持たない母親たちの、自己実現に対する焦りや不安が現れているように思われる。

第3章の3つの事例からもこのことは示唆されよう。A母は自分自身に対するネガティブな認識から、自身の母親としての価値の気づきに至った。B母はB子に対する評価の肯定的変化に伴い、自分自身に対する評価も同様に肯定的になった。C母は家庭という密室を飛び出したことで、個人としてのC子に気づき、向かい合うことができるようになった。このように母親自身が、自らを個人として価値ある存在として尊重することが、子育て不安からの脱出の手がかりとなり、母子相互交流実現へ導いていくと思われる。そこで初めて、子育てを通した母親自身の成長と自己実現という目標へ向かってスタートを切ることができるのではないだろうか。

V 今後の課題と展望

本研究は子育て支援をあえて謳わない親子教室が、その一翼を担うことを明らかにし、そこでの母親を臨床心理学的及び発達心理学的視点から新しい視点から捉えたものとして意義があると思われるが、次のような課題や検討点が多く残されている。環境要因や対象者の人数や偏り、事例数、データの収集方法、親子参加・複数参加からの考察にとどまり、共同注視の形態の効果まで至らなかったことなどが挙げられる。以上の点を検討し、研究として洗練させていくことが必要であると思われる。そ

して展望としては、母親の自己実現も視野に入れた、子育て支援の新たな側面の発展を試みていきたいと考えている。

<付記> 半年にわたり毎回のレッスンを見学させていただき、たくさんの質問にも何度も快く丁寧に答えてくださった お母様方、お子様方、担当講師のH先生に感謝を申し上げるとともに、現在もY教室で活躍なさっていることを心よりお祈り申し上げます。また、論文の執筆にあたりご指導いただきました創価大学の園田雅代先生に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) Ainsworth, M.D.S., Brehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. (1978). Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 2) Carter, B. & McGoldrick, M. (1989). The Changing Family Life Cycle: Framework for Family Therapy (2nd ed), Boston, Allyn & Bacon
- 3) ベネッセ. (2003). 第2回子育て生活基本調査.
- 4) ベネッセ. (2005). 第3回幼児の生活アンケート報告書・国内調査.
- 5) Elkind, D. (1997). 早期教育への警笛. 創森出版.
- 6) Erikson, E.H. (1963). 仁科弥生訳, 幼児期と社会1977. みすず書房
- 7) 前同
- 8) 前同
- 9) 藤木悦子. (2004). 子育て中の親の意識と親子活動に関する一考察. 福岡女子短大紀要.
- 10) 繁多 進; 菅野幸恵; 白坂香弥; 真栄城和美. (2001). 乳幼児に対する母親の感情と行動. 母子研究.
- 11) 平木典子. (1998). 家族との心理臨床. 垣内出版.
- 12) 細井啓子. (1999). 母親のあせりは子どもに何をもたらすか. 児童心理臨時増刊.
- 13) Kagan, S.L. (1968). 三宅和夫訳, 発達心理学, 誠信書房
- 14) 亀口憲治. (2000). よい親子関係とは. 児童心理臨時増刊.
- 15) 神原文子. (2000). 子育てと夫婦の関係. 教育と医学.
- 16) 前同
- 17) 柏木恵子; 岩本素子. (1994). 「親になる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究第5巻第1号.
- 18) 柏木恵子. (1995). 親の発達心理学-今よい親とは何か. 岩波書店.
- 19) 柏木恵子. (2001). 子育て支援を考える. 岩波書店.
- 20) 前同
- 21) 前同
- 22) 前同
- 23) 柏木恵子; 大野祥子; 平山順子. (2006). 家族心理学への招待. ミネルヴァ書房.
- 24) 教井みゆき; 遠藤利彦. (2005). アタッチメント. ミネルヴァ書房.
- 25) 前同
- 26) 前同
- 27) 岸 良範. (1998). 自主性・積極性とおとなの関わり. 著: 小川捷之, 心理臨床入門 I. 山王出版.
- 28) 輿石 薫. (2005). 育児不安の発生機序と対処方略. 風間書房.
- 29) 前同
- 30) 前同
- 31) 前同

- 32)前同
- 33)前同
- 34)鯨岡 峻.(2002). <育てられる者>から<育てる者>へ. 日本放送出版協会.
- 35)Minuchin,S.(1974). 山根常男監訳.「家族と家族療法」1984. 誠信書房
- 36)村井則子 「母親の心理学」 東北大学出版会 2002
- 37)村瀬嘉代子.(2003). 統合的心理療法の考えかた. 金剛出版.
- 38)前同
- 39)前同
- 40)永久ひさ子.(1999). 専業主婦だからできること. 児童心理臨時増刊 .
- 41)前同
- 42)岡村達也.(2005). 子どもの話を聞ける親. 児童心理
- 43)大日向雅美.(2002). 発達心理学の立場から. こころの科学 .
- 44)前同
- 45)前同
- 46)小川素子.(2006). 散歩や遊びなどでゆったりした時間を持つ. 児童心理臨時増刊 .
- 47)品川不二郎; 品川孝子.(1992). あなたはよい親?よくない親?. 田研出版株式会社.
- 48)高石恭子.(2007). 現代女性の母性観と子育て意識の二面性. In 高石恭子, 育てることの困難. 人文書院.
- 49)武田信子.(2007). 子を人として尊んで育てる. In 高石恭子, 育てることの困難. 人文書院.
- 50)田中千穂子.(2000). 子育てのメンタルヘルスと心理相談. 教育と医学 .
- 51)前同
- 52)田中喜美子.(2004). 母子密着と育児障害. 講談社+α新書.
- 53)土岐圭子.(2006). 親の教育力を育てるには. 教育と医学 .
- 54)前同
- 55)前同
- 56)馬居政幸.(2002). 家族社会学の立場から. こころの科学 .
- 57)前同
- 58)山崎 晃.(2000). 子育て相談ネットワークについて考える. 教育と医学 .
- 59)前同
- 60)前同